

硫黄島からの手紙

2006(平成18)年12月9日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・製作・音楽＝クリント・イーストウッド／出演＝渡辺謙／二宮和也／伊原剛志／加瀬亮／中村獅童／裕木奈江（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2006年アメリカ映画／141分）

第1章

見ごたえも面白さも満点！

……第1部は硫黄島上陸作戦の戦闘シーンを圧倒的迫力で描いたが、第2部は栗林中将をはじめとする数人の特徴的な登場人物たちの、心の内面に焦点をあてたもの。しかし、新聞記事やパンフレットの中でさかんに紹介されている18kmも掘られた地下壕の実態や、それを駆使した戦闘の様子があまり伝わってこないのは少し残念……。しかし、家族を思う将兵たちの気持は日米共通だから、ほとんど日本人、9割以上日本語という異色のハリウッド映画でも、十分アメリカ人の心にその思いは伝わるはず……。こんなクリント・イーストウッド監督作品は、今年は何の賞を……？

公開日は開戦日の翌日……

1941年12月8日未明（日本時間）、日本軍はハワイ真珠湾に奇襲攻撃を仕掛けた。戦後60年の節目となった昨年の12月8日は、多くの社説や解説記事でその点が論じられたが、今年はその数が激減。しかしそれに代わって、12月8日（金）、9日（土）の新聞各紙には、毎日新聞の「島の形を変えた激戦36日の跡」『『硫黄島からの手紙』封切り』をはじめとして、『硫黄島からの手紙』の特集記事や宣伝がズラリと勢ぞろい。中田秀夫監督の『リング』（98年）や清水崇監督の『呪怨』（02年）などのジャパン発のホラー映画がハリウッドや韓国を席捲したのはめでたいことだが、ジャパン発の戦争映画が激減していることは実に憂うべき状況……。そんな中、クリント・イーストウッド監督が、戦争映画、とりわけ「硫黄島の戦い」という今ドキの日本人監督がほとんど目をつけることがないであろう激戦地に目をつけて描いたことは、何とも意義のあること。

第1作『父親たちの星条旗』（06年）を公開初日の10月28日に観た時は観客の少なさにビックリしたが、『硫黄島からの手紙』の公開初日の12月9日は約70%の入りでひと安心……。梅田ピカデリーでは『DEATH NOTE（デスノート）the Last name』（06年）が相変わらずの観客動員を続けているし、12月1日公開の『武士の一分』（06年）も好調のよう。さて、『硫黄島からの手紙』が今後どの程度の観客を集めることができるのか、大いに注目したい。

地下壕の広さや熱気、臭気は……？

クリント・イーストウッド監督が『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）に続く次の作品を「硫黄島」に定めたのとたまたま同じ時期の2005年に上梓されたのが、梯久美子氏の『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』（新潮社刊）。この本は第37回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞し大きな話題を呼んだが、パンフレットにはその梯氏による「栗林忠道が生きた場所——硫黄島・司令部壕跡に立って」があり、地下壕の様子が詳しく語られている。また、前記毎日新聞「島の形を変えた激戦36日の跡」も「曲がりくねった壕内 トーチカには機関銃」との見出しで、地下壕の実態を生々しく解説している。それらによると、地下壕の実態は狭い、暑い、そして濁った空気と鼻をつく硫黄の臭気がキーワード……。兵士は手足を伸ばすこともままならないまま、その通路で眠ったらしい。また、栗林忠道の「戦闘指揮所」も高さ5メートル、縦横10メートル足らずの「部屋」だったらしい……。しかし、スクリーン上で観る限り、地下壕の中のそんな熱気や臭気はあまり感じられなかったし、地下壕の広さは意外に広いもの……。これには撮影上の必要性も影響しているのだろうが、これらの文章から得ていたイメージとかなり違っていたのは意外……？

地下壕の戦略的・戦術的活用ぶりは……？

他方、硫黄島の大きさは東西8.5km、南北4.5kmだが、掘られた地下壕の総延長は18kmとのこと。栗林中将が指揮官として硫黄島に降り立ったのは、1944年7月6日のサイパン陥落に先立つ6月8日。そこから米軍の上陸が始まった1945年2月19日までの約8カ月間、栗林中将はどのような戦略的・戦術的位置づけの下に、

どこに、どのように地下壕を掘ったのか？ そして36日間の戦いの中で日本軍はその地下壕をどのように活用して戦ったのか？ 私としてはその点に大きな興味があったのだが、残念ながらこの映画はそこまでは……？ 映画の中でそこまで詳細に描くことは所詮無理かもしれないが、私としてはその点が多少不満……？

合理主義者 VS 精神主義者

硫黄島の戦いを見るクリント・イーストウッド監督の目は、合理主義者の軍人と精神主義者の軍人を明確に区別している。前者の代表が栗林中将（渡辺謙）だが、その良き理解者がバロン西こと西竹一中佐（伊原剛志）。西は1932年ロサンゼルス・オリンピックの馬術競技金メダリストだから、英語も堪能なら、ジャズも大好きという当時としては何とも異色な軍人。ところが、同時に彼は武士道精神も豊かで、負傷したアメリカ兵に対して乏しい薬を使って「治療してやれ」という命令さえも。合理主義者の彼は、栗林中将の待機命令、退却命令を忠実に守り、無謀な突撃や玉砕を禁じたが、爆弾によって目が見えなくなった彼が、部下を退却させた後、銃による自決の道を選んだのは……？ また、いくら馬術の金メダリストだとしても、硫黄島まで愛馬を連れてきたというのはホントの話……？

他方、栗林中将配下の幕僚たちはそのほとんどがあの当時の日本陸軍の精神主義者ばかりだから、地下壕にこもって徹底抗戦するという栗林戦略を理解しないバカが多かったのは当然。そして、その典型が中村獅童扮する伊藤中尉。『男たちの大和／YAMATO』（05年）ではカッコいい役だったが、この『硫黄島からの手紙』では栗林中将の方針に反対して、部下たちに「潔く自決しろ！」と迫ったり、たった1人で戦車をやっつけると宣言して出かけた挙げ句、何の戦果もあげられないまま、あえなく捕虜になってしまうという1番カッコ悪い役に「挑戦」！ おいしい役（？）を二宮和也に譲り、こんな役でしか登場できなかったのは、酒気帯び運転のうえ信号無視していたことが報道されたり、浮気がバレていよいよ竹内結子との離婚が近いと噂されているように、普段の行いが悪いせい……？

一般兵士 VS エリート兵士

硫黄島の日本軍守備兵は約2万2千人だが、そのほとんどは一般の召集令状で召集された名もなき兵士たち。クリント・イーストウッド監督がその代表として登場させたのが、「花子、この手紙が届くことはないだろう。でも、お前と赤ん坊のことだけが気がかりだ」と手紙を書く小さなパン屋の若主人、西郷（二宮和也）。妊娠中の妻花子（裕木奈江）を残しての出征はつらいものだろうが、あの時代においては仕方なし。「大きな声では言えないが……」と断ったうえで、西郷はお腹の中の子供に向かって「必ず生きて帰ってくるからな」と約束したものの、バカな上官の下で浜辺に塹壕掘りをやっていたのでは戦死は確実……。しかし、栗林中将の登場によって、西郷は1度ならず2度までも危ういところを助けてもらうことに……。そして映画がラストに向かっていく中、「2度あることは3度ある」と言う栗林中将が西郷に命じたのは……？

他方、そんな硫黄島に新たに配属されて西郷らの同僚(?)になったのが、「内地」で憲兵隊員だった清水（加瀬亮）。「なぜ憲兵隊のエリート士官が俺たちと一緒に……」と西郷たちが怪しんだのは当然だが、それにはある深いワケが……。こんな対照的な2人の兵士の姿を描く中、クリント・イーストウッド監督の人間観察眼のたし加さが見事に浮かび上がってくる点に注目！

スマートな演出ぶりに感心！

映画の冒頭は、2006年の今なお続いている硫黄島の地下壕の中での遺骨や遺品収集作業のシーンから。つまり、遺族たちにとっては61年前のあの戦争はまだ終わっていないわけだ。「何か発見したぞ」の声で遺骨や遺品の発掘作業はより慎重に進められていったが、そこで突然スクリーンはグブるように1944年6月、浜辺で塹壕掘り作業に精を出す兵士たちの姿に切り替わっていく。この映画のタイトル『硫黄島からの手紙』は非常に抽象的なもので、あの激戦地硫黄島から内地に向けた手紙が自由に出せていたわけではない。つまり、2万2千人の守備兵たちが心を込めて書いた手紙は、地下壕の中に埋められていた袋の中に入っていたものだったのだ。

それを埋めたのは誰？ そして、それを命じたのは誰？ また、発見されたおびただしい数の手紙の中に書かれていた内容は？ その手紙の1つが、西郷が妻に宛てて「花子、この手紙が届くことはないだろう。でも、お前と赤ん坊のことだけが気がかりだ」と書いたもの。映画の冒頭とラストを見事に結びつけるクリント・イーストウッド流のスマートな演出ぶりに感心！

フラッシュ・バックの多用は……？

第1部『父親たちの星条旗』は硫黄島への上陸直後にこれを一齐に叩こうとする日本軍守備兵からの攻撃を『プライベート・ライアン』(98年)並みの迫力(?)で描いていたが、クリント・イーストウッド監督は第2部『硫黄島からの手紙』では、戦闘シーンよりも栗林中将をはじめとする登場人物たちの内面に重点を置きたかったよう。そこで多用された手法が、主要人物たちの過去の姿を紹介するためのフラッシュ・バック。

フラッシュ・バックとは「進行しているストーリーの時間的な連続性を破って、過去に起きたことを提示する手法」(『映画検定 公式テキストブック』186頁参照)だが、西郷と清水両名の過去が、この手法を使ってかなり詳しく紹介される他、若かりし日の栗林中将のアメリカでの生活を描くシーンにも登場する。この手法を使えば、一瞬硫黄島の現実から目が離れて、なぜ西郷や清水がこの島に来ているのがよくわかり、下手な説明や議論をする必要がなくなるので便利だが、あまり多用されるとちょっと目につくもの……。ホントは伊藤中尉がなぜこんな頭の固い軍人になったのかというフラッシュ・バックによる説明も入れたかったのかもしれないが、それは既に限度を超えているし、そもそも伊藤中尉の人物像にクリント・イーストウッド監督はあまり興味がなかったのかも……？

意外に命令が不徹底……

アメリカ留学の経験を持った栗林中将は、陸軍大学校を2番の成績で卒業したエリートとのこと。また、アメリカの膨大な軍事力・経済力を目の当たりにした栗林中将は、アメリカとの開戦には最後まで反対したらしい。そんな栗林中将が、硫黄島を死に場所と覚悟し、指揮官として、圧倒的な物量を誇るアメリカ軍を迎

え撃つことになったのは皮肉なことだ。しかし、そこはエリート軍人のこと、与えられた状況をきっちりと割り切って、徹底的に戦略・戦術の工夫をしたことがよくわかる。そして、考えに考えた未出した結論が、地下壕にこもっての徹底抗戦だが、水際上陸作戦の放棄や玉砕の禁止という命令に、頭の固い幕僚たちが反対したのは当然。さらに、約8カ月間続いた地下壕掘りについても、「穴掘りしに来たのではない」「モグラのような戦い方はイヤ」という声が強かったのも当然。

しかし、栗林中将はそんな反論や反発をきっちりと押さえ込み、一糸乱れぬ指揮命令系統の下、36日間の死闘を展開した、と私は思っていた。ところがこの映画を観ていると、意外に栗林中将の命令は不徹底で、あちこちにほころびが出ていることにビックリ。もちろん、圧倒的な攻撃にさらされながらの戦闘だから、情報伝達が不十分だったり、途切れたりすることがあるのは当然だが、スクリーン上には伊藤中尉の明確な命令無視や勝手な行動をはじめとして、さまざまな指揮命令系統のほころびが露呈されてくる。「上官の命令は絶対」という教えは、日本陸軍では徹底していたのでは……？

投降兵の射殺はイラク戦争批判……？

この映画にはクリント・イーストウッド監督らしい(?) 意外なシーンが登場する。それは、投降した日本兵に対するアメリカ兵の対応ぶり。この映画は硫黄島の戦いにおける栗林中将の人物像に焦点をあてたものだが、それ以上にクリント・イーストウッド監督の注目点は、一般兵士代表としての西郷……。上官からの自爆命令にやむをえず従う同僚たちを見ながら、栗林中将の「退却して合流せよ」との命令を聞いた西郷は、自爆命令に逆らい退却しようとしたが、それを阻止しようとしたのが憲兵あがりの清水。しかし、その後の戦闘の中でさまざまなものを学び、また西中佐のアメリカ兵捕虜に対する対応を見た清水は、次第に「生きて帰りたい」という気持が増大していくことに……。

もっとも、そうだからといって、厳しい監視の目をくぐって清水が投降することを決意し、西郷がそれに協力したのは全く意外。組織的戦闘が終了した後、個人個人の判断において投降することはあっても、指揮官の命令にもとづく組織的

戦闘が継続している間に投降するのは、もちろん軍法会議モノで、最低の兵士と言われても仕方がないもの。そんな兵士として最も恥すべき行動を清水と西郷がとったのは、いくらクリント・イーストウッド監督作品でも納得できないもの……。

もっとも、クリント・イーストウッド監督が描きたかったのは、日本兵の投降そのものよりも、投降兵に対するアメリカ兵の対応ぶり。すなわち、次の攻撃に移るため清水を含む捕虜2名を見張るように命令された2人のアメリカ兵は、そんなイヤな役はゴメンとばかり、いきなり2名の投降兵を射殺してしまうことに。こりゃいくら何でも無茶苦茶……。民主主義国アメリカの軍隊であっても、こんな捕虜虐待行動をとるの……。こりゃ明らかに、「イラク戦争」において捕虜となったイラク兵に対してアメリカ兵がとった残虐な行為に対するクリント・イーストウッド監督の抗議であり、イラク戦争批判のための1シーン……？

アメリカ人にもわかるように……

硫黄島2部作の第2部『硫黄島からの手紙』は形式的にはハリウッド映画だが、実質的には登場人物やセリフのどこから見ても100%日本映画……。しかし、日本人でも栗林中将をよく知らない人が多いのだから、アメリカ人でその名を知っている人はほとんどいないのでは……。それとも、日本兵以上の死傷者を出すことを余儀なくされた憎っくき日本の名指揮官、ということで栗林中将の名前はアメリカではよく知られているのだろうか……？

それはともかく、日本兵ばかりが登場し、日本語のセリフをしゃべるハリウッド映画は珍しいはずで、そんな作品を多くのアメリカ人に観て理解してもらうためには、日米共通の将兵たちの「内面」に焦点をあてる必要があったのは当然。そこで、クリント・イーストウッド監督は例外的に唯一人だけ捕虜になったアメリカ兵を登場させ、彼に宛てた母親からの手紙を西中佐が日本語訳をして兵たちに語って聞かせたが、これは実にうまい演出。母親が、戦地にいる息子を思う気持に日米で違うはずがないことが、このシーンで一気に際立つことに……。

「天皇陛下、万歳」と叫ぶ日本兵の奇妙さや、いくら炎放射器を浴びせても地下壕の中から出てこない日本兵の不可解さはアメリカ人に共通の感覚かもしれ

ないが、地下壕にこもって戦った兵士たちが家族宛てに書いた手紙はアメリカ人でもきっとわかるはず……。そんな確信の下にクリント・イーストウッド監督がこの映画をつくっていることは、あなたの心にも十分伝わってくるのでは……。この映画は、既に米映画批評会議で作品賞を贈られ、また米ロサンゼルス映画批評家協会賞で最優秀作品賞に選ばれている。アカデミー賞の前哨戦とされる2つの映画賞を立て続けに制した本作は、アカデミー賞をはじめとする今年の映画賞レースで、どんな賞を獲得するのだろうか……。? 2006(平成18)年12月11日記

ミニコラム

アカデミー賞、SHOW-HEYの予想は？

2月25日に発表された第69回アカデミー賞の作品賞候補は、①マーティン・スコセッシ監督の『ディパーテッド』、②クリント・イーストウッド監督の『硫黄島からの手紙』、③英国映画『クイーン』、④小規模な独立系映画『リトル・ミス・サンシャイン』、⑤日本の菊地凜子ら2人が助演女優賞候補となった国際色豊かな『バベル』と多種多様。それは国際色豊かとなった監督賞候補も同じ。したがって、その予想は例年以上に難しかったうえ、投票権を持つアカデミー会員の好みは移り気……。? そんな中、今年はまだ1本のハリウッディ映画『ディパーテッド』が作品賞に選ばれ、脚色賞・編集賞の他、過去5度も候補となりながら受賞を逃してきたスコセッシが念願の監督賞を受賞した。

各賞候補となった作品をすべて観たわけではないから、SHOW-HEYの

アカデミー賞予想もいい加減なもの……。? そこで今回は、作品賞・監督賞については早々と予想をパス。だってキネ旬恒例のプロの映画評論家による「発表直前! 予想座談会」だって減多に的中しないのだから、駆け出しの評論家 SHOW-HEY では……。?

また例年最大の関心事である主演女優賞も今年に限っては助演男優賞と共に誰でもオーケーという関心の低さだった。これに対して、主演男優賞は、『ラストキング・オブ・スコットランド』のフォレスト・ウィテカー、助演女優賞は『ドリームガールズ』のジェニファー・ハドソンという私の予想はピッタリ。もっとも、これは関係者一同が大本命と予想し、キネ旬予想でも3人が一致していたから、あまり自慢にならないが……。

2007(平成19)年3月8日記